

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 社会科学系科目における学生の習熟度に関する計量分析：本学国際言語学部の国際関係論のケース

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 授業の習熟度, 授業の満足度, 社会科学系科目, 勉強の動機付け キーワード (En): 作成者: 内田, 智大 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00006226">https://doi.org/10.18956/00006226</a>

# 社会科学系科目における学生の習熟度に関する計量分析

——本学国際言語学部の国際関係論のケース——

内 田 智 大

## 要 旨

本研究の目的は、2006年度2学期に「国際関係論」を履修した学生を対象に質問票調査を行い、社会科学系科目に対して、彼らがどのような位置づけを持って勉強しているのかを明らかにすると共に、「国際関係論」の習熟度の説明要因を計量分析によって考察することにある。推計結果から判明した重要なことの一つは、教員が受講生の側に立った分かり易い授業を心がけて、彼らの知識の増加に資することが「授業の満足度」を高めることにつながる。但し、「授業の習熟度」を説明する要因と「授業の満足度」を説明する要因が必ずしも一致しないことから、それらを両立することが困難であることも分かった。

キーワード：授業の習熟度、授業の満足度、社会科学系科目、勉強の動機付け

## 1. はじめに

1996年4月、本学に国際言語学部が創設されて以来、早11年が過ぎた。これまで(2007年3月時点)、総勢約3,200名の卒業生を輩出してきた。創設当初、150名であった入学定員も、2008年度からは700名まで拡大する予定である。国際言語学部の学生は基本言語である英語の学習に加え、ドイツ語、フランス語、中国語の中から1言語を専修することを求められている。また、2000年4月からは、英語以外の1言語を専修する代わりに、英語コミュニケーションを媒介として社会科学系の科目を履修する国際ビジネスコミュニケーションコース(以降、国際ビジネスコースと呼ぶ)も開設された。国際ビジネスコースの目標として、「国際学」や「外国学」などの関係科目で身につけた知識を基盤に、高いコミュニケーション能力を持って、地球社会に貢献できる人材の育成が掲げられている。しかし、その目指すところに違わない学生も多く見受けられる一方で、教務委員会などでは、そのコースにおいては「英語以外の1言語を専修する言語系コースの学生よりも、勉強意欲の低い学生が多い」と指摘されている。ゆとり教育の弊害かどうかは定かではないが、最近、本学に入学する学生の傾向として、「楽をし

て単位を取り、卒業したい」という学生も増えつつあることは否めない事実であろう。

本研究の目的は、2006年度2学期に「国際関係論」を履修した学生を対象に質問票調査を行い、国際言語学部で開講されている「経済学」や「経営学」といった社会科学系科目（以降、ビジネス系科目と同義で用いる）に対して、学生がどのような位置づけを持って勉強しているのかを明らかにすると共に、筆者が教えている「国際関係論」の習熟度の説明要因を考察することにある。このような研究を行おうとした理由としては、本学のような外国語大学で学ぶ学生が社会科学系科目に対して、どのように取組み、またどのような関心を抱いているかを明らかにした研究報告が一度も出されていないからである。また、学期末に実施される「授業評価」は単に教員の授業内容の評価結果であって、授業内容を一層充実させるために、具体的にどのような方策がなされるべきかが、いま一つ見えてこない。本学の基本理念の一つは「グローバル化時代を担う人材の育成」であるが、「国際学」を深化・充実させるために、今後カリキュラムを改定しようにも、現状では必要な情報・資料が不足している。そこで、本研究のような試みを行うことにした。

本論は5つの節から構成され、第2節でデータの収集方法、及び国際言語学部のカリキュラムにおける「国際関係論」の位置づけを説明した後、第3節では質問票の集計結果に関する概要を述べる。そして第4節では、「期末テストの点数」や「最終成績の評点」を科目習熟度の代理変数として、それらを説明する要因を計量分析により明らかにし、最後の5節で本論をまとめることとしたい。

## 2. データの収集方法と国際言語学部のカリキュラムにおける「国際関係論」の位置づけ

### (1) データの収集方法

調査対象者は、2006年度2学期に「国際関係論」を受講した学生である。調査は、2007年1月23日の授業中に15分ほどかけて実施した。この日は期末テストの日であったが、調査はテスト前に行った。その理由としては、テスト後に行えば、テスト結果が予想しやすくなり、回答者の回答にバイアスがかかる懸念があったからである。有効回答者数は、170名（男80名、女90名）であった。「国際関係論」の履修者数は183名であることから、母集団に対する有効回収率は、92.9%であった。学年別に見ると、1回生が132名、2回生が17名、3回生が7名、4回生が14名であった。学生に回答してもらった質問票は2ページにわたっており、計16の質問から構成されている。質問項目は、回答者の選択したコース、そのコースを選択した理由、「国際関係論」の履修理由、TOEFLの点数、高校時代の社会系科目に対する取組みの程度、「国際関係論」に対する学生の評価、期末テストに対する準備の程度、他の科目と比較してのビジ

ネス系科目の重要性などから構成されている。「国際関係論」の評価に関連する質問では、本学が課す「授業評価」とは異なり、回答者に4段階で評価してもらうように試みた。この理由として、「わからない」、「どちらでもない」、「ふつう」などの中央値を含む5段階評価では、心理学で言われるところの中心傾向の誤差が生じて、回答者が曖昧な回答を選択することを懸念したからである。無回答欄を回避するために、16問のうち1問だけを記述式の質問にし、残りは全て選択式の質問にした。選択式の質問の集計では、事実にもっと近い回答を回答者に選択してもらうために、選択肢を一つだけ選んだ回答のみを有効回答とし（但し、問5を除く）、複数の選択肢を選んだ回答は無効とした。本研究の目的は、「国際関係論」の習熟度に関する説明要因を明らかにしようとすることから、調査は記名式で行った。勿論、回答内容は最終評価や期末テストの点数に一切反映されないことを、調査前に回答者に説明した。

## (2) 国際言語学部のカリキュラムにおける国際関係論の位置づけ

「国際関係論」は4単位の科目であり、1年次における国際ビジネスコースの必修科目の一つである。したがって、履修生の多くは1回生である。これ以外の国際ビジネスコースのコース必修科目は、1年次ではビジネスコミュニケーションⅠ、2年次ではマクロ・ミクロ経済、国際経営論、人事労務管理論、ビジネスコミュニケーションⅡ、3年次では経済政策論、国際マーケティング、国際経済論の計8科目である。

筆者は「国際関係論」の中で、世界を取り巻く諸問題を経済学、政治学、社会学など総合的・学際的なアプローチを通じて講義することを試みている。学生に求める到達目標は、国際問題への関心をさらに高め、国際問題を多面的に捉える思考能力を養成することである。具体的に取り上げた授業テーマは、戦後の国際経済、米ソ冷戦の構造、ポスト冷戦の覇権国アメリカ、南北問題、援助と開発、パレスチナ問題、イラク問題、朝鮮半島問題などである。

## 3. 集計結果の概要

### (1) 履修生のバックグラウンド

履修生のバックグラウンドは、表1に示されている。回答者の所属するコースは、124名が国際ビジネスコースであり、残りの46名が英語以外のもう一言語を選択する言語系コースである。各々のコースを選択した理由としては、「コースに対する関心」を挙げた回答者が多かったが、国際ビジネスコースの場合、「英語以外の言語を勉強したくないから」を挙げた回答者が同コースの29.8%も占めていた。「英語以外の言語を勉強したくないから」と回答した学生のTOEFLの平均点数は441.1点であり、全体平均点の447.8点よりも低く、300点台の学生も3名含まれていた。このことから、「英語が好きで、英語以外の言語を勉強をしたくないから」

と言うよりもむしろ、「英語以外のもう一つの言語を勉強する余裕がない」という学生も多いと推察される。また、「特に理由なし」と回答した学生が12.9%もあり、明確な意図を持ってコースを選択していない者がいることが窺われる。

「国際関係論の履修理由」の質問に対し、55.3%の学生が「必修だから」と回答しているが、「国際関係論」が国際ビジネスコースの必修科目の一つであり、且つ履修生の多くが入学間もない1回生ということらを考慮すれば、その回答結果も想定される範囲である。但し、「大学生としての教養を高めるため」、及び「国際事情に興味を持っているため」の回答結果は、合計しても僅か20.6%に過ぎず、履修登録の時点で「国際関係論」を積極的に勉強したいと考えていた学生は極めて少ない。「その他」の理由の中には、中国語やドイツ語の単位を前期に落としたために、言語系コースをやめて、国際ビジネスコースに仕方なく移ったという回答も含まれていた。

「高校時代における社会系科目の取組みの程度」を尋ねた質問に関しては、「大学入試科目としてかなり勉強した」、「授業科目としてはかなり勉強した」の回答を合計しても37.1%に過ぎず、回答者の6割強は高校時代に社会系科目をあまり勉強しなかったことが窺われる。センター試験入試を除いて、本学の入試科目に社会系科目がないことからすれば、この数字も理解できる。国際ビジネスコースを選択している学生と言語系コースを選択している学生との間で比較すれば、前者のグループの中で「大学入試科目としてかなり勉強した」と回答した者が12.9%、「授業科目としてはかなり勉強した」と回答した者が27.4%であったのに対し、後者のグループではそれぞれ4.3%、23.9%であった。このことから、国際ビジネスコースの学生は言語系コースの学生よりも、ある程度社会系科目を勉強したバックグラウンドを持っており、大学に入ってもそれを継続したいという希望はあると推察される。但し、国際ビジネスコースの回答者の14.5%、言語系コースの回答者の13.0%が「授業科目としてほとんどなかった」と回答しており、このような学生が社会科学系科目に関心を持って、且つ授業についていけるのかは、今後調査すべき課題である。

尚、回答者の「TOEFL」の点数は、最高点が590点、最低点が357点、全体の平均点が447.8点であった。国際ビジネスコースの学生の平均点は439.5点であったのに対し、言語系コースの学生の平均点はそれよりも10点以上も高い450.4点であった。

表1 履修生のバックグラウンド

[単位：人(%)]

選択コース	国際ビジネスコース：124 (72.9) 言語系コース：46 (27.1)
選択理由	ビジネス系科目への関心：70 (41.1) 中国語への関心：24 (14.1) ドイツ語への関心：3 (1.8) フランス語への関心：8 (4.7) 英語以外の勉強をしたくないから：37 (21.8) 特に理由なし：22 (12.9) その他：6 (3.5)
国際関係論の履修理由	必修だから：94 (55.3) 単位の取りやすさ：4 (2.4) 友人に誘われて：6 (3.5) 履修しやすい時間帯であったため：30 (17.6) 大学生としての教養を高めるため：4 (2.4) 国際事情に興味を持っているため：31 (18.2) 無回答：1 (0.6)
高校時代における 社会系科目の取組みの程度	大学入試科目としてかなり勉強した：18 (10.6) 授業科目としてはかなり勉強した：45 (26.5) 授業科目にはあったがほとんど勉強しなかった：82 (48.2) 授業科目としてほとんどなかった：24 (14.1) 無回答：1 (0.6)
大学に入ってからの他の 社会科学系科目の履修数	0科目：88 (51.8) 1科目：64 (37.6) 2科目：7 (4.1) 3科目：5 (2.9) 4科目：1 (0.6) 6科目：1 (0.6) 7科目：1 (0.6) 無回答：3 (1.8)
TOEFLの点数	350-399：13 (7.6) 400-449：71 (41.8) 450-499：57 (33.5) 500以上：16 (9.4) 無回答：16 (9.4)
1ヶ月以上の海外経験の有無	有り：41 (24.1) なし：128 (75.3) 無回答：1 (0.6)

(注) 括弧内の数字は回答者総数に対する割合であるが、小数点第2位を四捨五入したため、合計の数字が必ずしも100%になっていない箇所もある。

## (2) 履修科目に対する評価

履修科目に対する評価の回答結果は、表2にまとめられている。「授業の難易度」に関しての質問では、「大変難しかった」、「難しかった」と回答した者は、合計すると8割近い78.8%にも上った。「難しかった理由」を尋ねてみると、「高校からの前知識がほとんどなかった」という理由が最も多い55.6%を占めており、次に「授業の予習・復習などをしなかったから」が34.6%で続く。一方、「易しかった理由」を尋ねてみると、「高校からの前知識があったから」という理由が最も大きい45.9%を占めており、次に「教員の教え方が良かったから」が27.0%で続く。これらの結果からもわかるように、回答者は、高校時代における社会系科目の知識の蓄積を授業の難易度を決定する重要な要素として位置づけている。「国際関係論」のように、クラスサイズの大きい授業では、どうしても教員による一方的な講義方式になりがちである。教員は最初の授業において、授業の理解を深めるために各章で読んでおいた方がよい参考図書を挙げているが、クラスサイズの小さい語学系の授業と異なって、個々の学生の予習・復習の程度を確かめることは難しい。よって、授業の難度をやわらげる方策としては、1つにはクラスサイズを小さくすること、2つには「国際関係論」を受講させる条件として、受講者に高校などで使っていた教科書を再読させること、3つには授業の進行を遅くして、講義の中で章ごとの復習を行うこと、4つには視聴覚機材などを巧みに導入すること、5つには授業内容のレベルそのものを下げるなどが考えられる。

「授業の満足度」を尋ねたところ、「大変満足」、「満足」の回答結果を合計すると、86.5%に上っている一方で、「不満」と回答した者も12.9%を占めている。本学の教育目標において、「学生の満足度を高める授業」は重視されている項目の一つである。それゆえ、「不満」と回答した者を含めて「授業の満足度」を説明する要因を明らかにすることは重要である。この分析は、授業内容の習熟度を説明する要因を考察すると共に、第4節のところで計量分析を用いて説明を試みたい。

「(他の科目と比較しての) 期末テストに対する準備の程度」という質問に関しては、「かなり勉強した」、「勉強した」の回答結果を合計しても40.6%に過ぎなかった。「勉強しなかった」理由として、「他の科目の勉強やアルバイトなどが忙しく、勉強する時間が無かった」と回答した者が73.3%を占めた。質問としては、「他の科目の勉強」と「アルバイト」を分ける方が、「勉強しない」理由の実態に、より近づけたかもしれない。何れにせよ、「国際関係論」という社会科学系科目が履修生にとって、あまり重要視されていないか、或いは単位取得にはあまり困難ではないため、履修生がそれほど勉強する必要がないと考えている懸念がある。また、「勉強しなかった」理由として、「大学の勉強自体興味ない」と回答した者が4.9%もあり、彼らに勉強させる動機付けを与えることの難しさが垣間見られる。更に、勉強しなかった「その他」の理由として、「テストの日を知らなかった」、「テストの日を勘違いした」と回答した学生が含まれていた。

期末テストの点数、及び最終評価の点数に関しては、国際ビジネスコースの学生が言語系コースの学生を少し上回った。これは先ほどの学生の「履修理由」を見ても分かるように、国際ビジネスコースの必修科目という「国際関係論」のカリキュラムにおける位置付けによるところが大きいのではないかと考えられる。最終評価の点数は、期末テストが50%、授業時間中に出される課題が30%、出席が20%の割合でつけられる。それゆえ、必ずしも期末テストの結果が悪くても、単位を取れないことはないが、期末テストと最終評価の点数との間には、0.899と、強い正の相関関係が見られた。

表2 履修科目に対する評価

[単位：人(%)]

授業の難易度とその理由	大変難しかった：42 (24.7)  少し難しかった：92 (51.1) どちらかといえば易しかった：35 (20.6)  大変易しかった：1 (0.6) (難しかった理由) 授業の子習・復習などをしなかったから：46 (34.6) 高校からの前知識がほとんどなかった：74 (55.6) 授業内容に興味になかったから：11 (8.3) 教員の教え方が悪かったから：2 (1.5) (易しかった理由) 授業の子習・復習をしたから：1 (2.7) 高校からの前知識があったから：17 (45.9) 内容に興味があり、授業に集中できたから：7 (18.9) 教員の教え方が良かったから：10 (27.0)  無回答：2 (5.4)
授業の出席度	毎回出席：24 (14.1)  ほとんど出席：76 (44.7) 時々欠席：57 (33.5)  ほとんど欠席：13 (7.6)
授業後の知識の増加の程度	かなり増えた：9 (5.3)  増えた：49 (28.8) 少し増えた：108 (63.5)  以前と変わらず：4 (2.4)
授業の満足度	大変満足：16 (9.4)  満足：131 (77.1)  不満：22 (12.9) 大変不満：0 (0)  無回答：1 (0.6)
(他の科目と比較しての) 期末テストに対する準備の程度とその理由	かなり勉強した：3 (1.8)  ある程度勉強した：66 (38.8) 余り勉強しなかった：74 (43.5)  全く勉強しなかった：27 (15.9) (勉強した理由) 良い成績をとるため：43 (62.3)  国際関係が好きだから：13 (18.8) 勉強するのに特に理由なし：10 (14.5)  その他：3 (4.3) (勉強しなかった理由) 他の科目の勉強やバイトなどが忙しく、勉強する時間が無かった：74 (73.3) 国際関係に興味が無いから：9 (8.7) 大学の勉強自体興味なし：5 (4.9) その他：11 (10.7)  無回答：2 (1.9)
期末テストの点数 最終評価の点数	平均：16.5  国際ビジネスコース：17.0  言語系コース：15.0 平均：77.4  国際ビジネスコース：78.1  言語系コース：75.7

(注1) 括弧内の数字は回答者総数に対する割合であるが、小数点第2位を四捨五入したため、合計の数字が必ずしも100%になっていない箇所もある。

(注2) 期末テストの満点は50点、最終評価の満点は100点である。

### (3) 勉強の動機付け

表3は、「国際関係論」を含めた本学で開講されている科目を対象に、勉強の動機付けに関する質問の集計結果がまとめられている。まず、「勉強意欲を高める要素」という質問に関しては、「授業内容に対する関心度」が29.3%で最も多く、「社会における実用性」が24.8%、「教員の教え方」が17.2%で、それぞれ続く。「授業内容に対する関心度」を上げるには、教員の自助努力により、「教員の教え方」を向上させることも重要ではあるが、同時に、教員と学生との距離を近づけるために、小さなクラスサイズの実現、専門必修科目やコースにおける

必修科目数の削減なども、今後のカリキュラム改定において取り組むべき課題であると思われる。これらの課題は、記述式の質問に対する学生の回答結果からも指摘されていた。

「大学教育」と「社会における実用性」に関する整合性は、どの大学においても直面している問題であり、今までも大学内部、及び社会においても議論されてきた問題である。「資格学校」や「職業学校」としての大学の位置づけには、教員を中心とした大学内部からの抵抗も未だ大きい。しかし、少子化に伴い、「大学が選ぶ時代」から「大学が選ばれる時代」になった今や、「大学教育の学術性」だけではなく、「大学教育の実用性」も大学の外部から問われ始めている。本学においても、企業などの実務家出身の教員を増やしたり、仕事をテーマにした授業科目を開講するなどして、学生が自分なりの職業観を持てるよう、大学も学生のキャリア支援を教育カリキュラムの中で行う時期に来ているのではないかと思われる（内田、2007）。

「社会科学系科目の英語での聴講」という質問に関しては、「日本語での講義のほうが良い」と回答した者は71.2%であった。一方、「たとえ理解できなくも、英語での講義のほうが良い」と回答した者は27.1%に上った。しかし、「英語での講義」を希望する学生46名のTOEFLの平均点数を調べたところ、456.1点に過ぎなかった。その内訳を見ると、450-479点が10名、480-499点が6名、500点以上が7名であり、残りの23名の点数は449点以下か、或いは無回答であった。TOEFLの点数に反映された受講生の低い英語能力、及び先ほどの調査でも明らかになった彼らの「社会系科目の高校時代のバックグラウンド」の弱さを考慮すると、社会科学系科目の講義を英語で行っても、理解できる学生の数、そして理解の程度は限られていることが容易に推察される。それゆえ、受講生が社会科学系科目の知識を身に付けるにあたっては、「日本語での講義」を行う方が、はるかに効率がよいと思われる。

最後に、「社会科学系科目と語学系科目の重要性の比較」の質問に関しては、どちらかと言えば、「社会科学系科目を重視して勉強したい」と回答した者が14.7%、「語学系科目を重視して勉強したい」と回答した者が64.7%、「バランスよく両方を勉強したい」と回答した者が20.0%であった。回答者の72.9%が国際ビジネスコースに所属していることを考慮すれば、「社会科学系科目重視」と回答した学生が僅か14.7%に過ぎなかったことは、本学国際言語学部における多くの学生の入学動機は語学力の向上にあると考えられる。また、「社会科学系科目重視」と回答した学生の最終評価の平均点は73.8点であったのに対し、「語学系科目重視」と回答した学生の平均点は78.6点と、大きな差が見られる。このように、「社会科学系科目重視」と回答した学生の中には、「社会科学系科目を重視して勉強したい」と言うよりはむしろ、「語学系科目を避けて、社会科学系科目を選択している」といった学生もいると推察される。

表3 勉強の動機付け

[単位：人(%)]

勉強意欲を高める要素	社会における実用性：39 (24.8) 成績や単位取得：18 (11.5) 教員の教え方：27 (17.2) 学生をひきつける教員の性格：20 (12.7) テキストなどの教材：3 (1.9) 課題や宿題の多さ：2 (1.3) 授業内容に対する関心度：46 (29.3) その他：2 (1.3) 無効回答：13 (8.3)
社会科学系科目の英語での聴講	知識を吸収するには日本語で聴く方が効率的なので、日本語での講義の方が良い：78 (45.9) 英語力の向上には英語関連科目で勉強したいので、日本語での講義の方が良い：43 (25.3) たとえほとんど理解できなくても、英語での講義の方が良い：46 (27.1) 英語の方が理解しやすいので、英語での講義の方が良い：1 (0.6) 無回答：1 (0.6)
社会科学系科目と語学系科目の重要性の比較	社会科学系科目：25 (14.7) 語学系科目：110 (64.7) 両方：34 (20.0) 無回答：1 (0.6)

(注1) 括弧内の数字は回答者総数に対する割合であるが、小数点第2位を四捨五入したため、合計の数字が必ずしも100%になっていない箇所もある。

(注2) 「勉強意欲を高める要素」の質問に対し、複数の選択肢を回答した者は、無効回答として処理した。

#### 4. 授業の習熟度の説明要因

##### (1) データセットと推計モデル

本節では、前節の質問票調査の結果を踏まえ、「国際関係論」の習熟度の説明要因を考察するために、計量分析を試みたい。まず、質問票から得られたデータの定量化を行う。授業の習熟度を示す被説明変数として、どのような変数を選択するかは議論の分かれるところであると思われるが、利用できるデータで、且つ習熟度の基本的な代理変数として、「期末テストの点数」、及び「最終評価の点数」という2つの変数を選ぶ。一方、授業の習熟度を説明する変数として、12の変数を選ぶ。「性別」はダミー変数を用いて、男性を0、女性を1と置く。「コース名」はダミー変数を用いて、「言語系コース」を0、「国際ビジネスコース」を1と置く。「高校時代のバックグラウンド」は、「授業科目としてほとんどなかった」(=1)から「大学の入試科目としてかなり勉強した」(=4)までの4点尺度を用いる。「関連科目の履修」は、大学に入ってから履修した社会科学系の科目数、及び18年度2学期に履修している社会科学系の科目数の合計を用いる。「授業の難易度」は「大変易しかった」(=1)から「大変難しかった」(=4)まで、「授業の出席度」は「ほとんど欠席」(=1)から「毎回出席」(=4)まで、「知識の増加の程度」は、「以前と変わらず」(=1)から「かなり増えた」(=4)まで、「授業の満足度」は「大変不満」(=1)から「大変満足」(=4)まで、「期末テストの準備」は「全く勉強しなかった」(=1)から「かなり勉強した」(=4)まで、それぞれの変数で4点尺度によるコーディングを行った。「重視科目」は、「社会科学系科目」と回答したデータをダ

ミー変数の1と置き、「語学系科目」、及び「両方」と回答したデータは0と置く。最後に、「海外経験」は、「中学生になってから1ヶ月以上の留学経験、或いは1ヶ月以上海外で暮らした経験がある」と回答した者をダミー変数の1と置き、経験のない者は0と置く。

よって、授業の習熟度を説明する要因を測るために以下の2つのモデル式を用意する。

モデル式1：期末テストの点数 = f (性別、コース名、高校時代のバックグラウンド、関連科目の履修、TOEFLの点数、授業の難易度、授業の出席度、知識の増加の程度、授業の満足度、期末テストの準備、重視科目、海外経験)

モデル式2：最終評価の点数 = f (性別、コース名、高校時代のバックグラウンド、関連科目の履修、TOEFLの点数、授業の難易度、授業の出席度、知識の増加の程度、授業の満足度、期末テストの準備、重視科目、海外経験)

## (2) 推計結果

授業の習熟度の説明要因を検討するために、重回帰分析を行った推計結果が表4に示されている。「期末テストの点数」を説明する変数として、「期末テストの準備」(1%の有意水準)、「関連科目の履修」(10%の有意水準)、「授業の難易度」(10%の有意水準)、「重視科目」(10%の有意水準)がそれぞれ有意な変数として発見された。

最初に、「期末テストの準備」の回帰係数の符号がプラスであることから、「勉強した」と回答した学生ほど、期末テストの点数は高くなっている。このことは一見、当然のことではあるが、「国際関係論」という科目の好き嫌いに関係なく、或いは関心の有る無しに関係なく、「勉強すれば、成果が表れる」という非常に重要なことを示唆している。

次に、「関連科目の履修」が多ければ、期末テストの点数も高いことを、推計結果は示している。特に、本学の場合、高校時代に社会科学系科目を十分に勉強していない学生も多いことから、基礎的な社会科学系科目であっても、彼らがそれを十分に理解するには時間を要するかもしれない。このことを考慮すれば、大学は単に整合性のない多くの必修科目を学生に課すのではなく、学生が幾つかの段階を経て、社会科学に関する知識を深めていけるようなカリキュラムの改正が必要である。

また、「授業の難易度」の回帰係数がプラスの符号で有意になっており、「授業が易しかった」と回答した学生ほど、期末テストの点数が高かった。興味深いことには、前節の第1項で述べたように、多くの回答者は授業の難易度を決める要素として、「高校時代の前知識」を挙げているが、計量分析からは、それが(=高校時代のバックグラウンド)全く有意な変数として発

見されなかった。このことからすると、授業の習熟度を高める要素として、「高校時代の前知識」よりはむしろ、「整合性のある関連科目の履修」が強く影響しているのではないかと、推察される。

「重視科目」の回帰係数の符号がマイナスであるということは、「社会科学系科目を重視して勉強する」と回答した学生の方が、期末テストの点数が低いことを示している。このことは、前節の第3項で指摘したように、「社会系科目の重視」と回答した学生が「社会科学系科目を重視して勉強したい」と言うよりはむしろ、「語学系科目を避けて、社会科学系科目を選択」しているのではないかという推察を、統計学的に裏付ける結果になっている。

尚、「知識の増加の程度」は「期末テストの点数」を説明する有意な変数としても、また、後で述べる「最終評価の点数」を説明する有意な変数としても発見されなかった。この理由として、各々の受講生の社会系科目に対する知識の水準がもともと大きく異なっているからではないかと推察される。すなわち、ある学生が受講前に既に多くの知識を持っていて、高い点数をとった場合、「受講後の知識増加の程度」という質問に対し、その学生は「少しだけ増加した」と回答するかもしれない。逆に、別のある学生は受講前の知識の水準が極端に低く、低い点数しか取れなかった場合、同様の質問に対し、その学生は「かなり増加した」と回答する可能性も高い。

表4 授業の習熟度の説明要因

説明変数	被説明変数	期末テストの点数	最終評価の点数
性別 (男性 = 0、女性 = 1)		-1.170 (-0.92)	-0.198 (-0.10)
コース名 (言語系 = 0、国際ビジネス = 1)		0.842 (0.56)	0.560 (0.25)
高校時代のバックグラウンド		-0.073 (-0.10)	0.696 (0.61)
関連科目の履修		1.320 (1.91) *	2.088 (1.99) **
TOEFL の点数		0.024 (1.51)	0.048 (2.01) **
授業の難易度		1.709 (1.74) *	2.195 (1.47)
授業の出席度		0.929 (1.20)	3.198 (2.73) ***
知識の増加の程度		1.702 (1.53)	0.875 (0.52)
授業の満足度		-0.386 (-0.27)	-0.554 (-0.26)
期末テストの準備		4.219 (4.57) ***	6.797 (4.85) ***
重視科目 (語学系及び両方 = 0、社会科学系 = 1)		-3.333 (-1.86) *	-5.209 (-1.91) *
海外経験 (なし = 0、あり = 1)		0.289 (0.19)	0.357 (0.16)
定数項		-12.665 (-1.51)	24.720 (1.95)
自由度調整済み決定係数		0.241	0.268
サンプル数		170	170

(注) \*\*\*、\*\*、\*はそれぞれ1%、5%、10%の水準で統計的に有意であることを示す。括弧内は、t値。

一方、「最終評価の点数」を説明する変数として、「授業の出席度」（1%の有意水準）、「期末テストの準備」（1%の有意水準）、「関連科目の履修」（5%の有意水準）、「TOEFLの点数」（5%の有意水準）、「重視科目」（10%の有意水準）がそれぞれ有意な変数として発見された。前節の第2項でも述べたように、「最終評価の点数」と「期末テストの点数」との間に、プラスの高い相関関係があるように、推計結果は似たものになったが、それらを説明する変数には若干の違いが見られた。

「最終評価の点数」を説明変数にとった場合には、新たに「授業の出席度」もその変数を説明する要因になった。この理由として、「期末テストの点数」は「最終評価の点数」に影響を与える一要素であるが、「最終評価の点数」に影響を与える別の大きな要素として、授業内容に関するコメントの提出課題があるためである。この課題は各章に1回か2回程度、授業時間内に行われるため、「授業の出席度」が多いほど、この課題に対する点数も高くなり、ひいては「最終評価の点数」も高くなる。「関連科目の履修」、及び「重視科目」は先ほどと同様、有意な変数として発見されたが、「最終評価の点数」の場合には、もう一つの新たな有意な変数として「TOEFLの点数」が発見された。但し、英語力を示す「TOEFLの点数」の回帰係数が0.048と小さな値であることから、影響力は小さいと考えられる。その証左として、「最終評価の点数」と「TOEFLの点数」の相関係数は0.191と、強い正の相関関係があるとは言えない。

最後に、本稿の目的とは少しずれるが、「授業の満足度」を説明する要因を知ることは教員にとって重要なことなので、敢えて、この作業を試みる。被説明変数は勿論、「授業の満足度」をとる。説明変数は、先ほどのモデル式1、及びモデル式2で用いた変数から、「授業の満足度」を除き、「最終評価の点数」を加えた計12の変数をとる。「期末テストの点数」を説明変数に加えなかった理由として、統計学的に当然のことではあるが、「期末テストの点数」と「最終評価の点数」の間に強い相関関係があり、多重共線性が起こることを回避したかったからである。

実際に、12の説明変数を被説明変数である「授業の満足度」に重回帰させた推計結果が、表5に示されている。有意な変数として、「性別」（10%の有意水準）、「授業の難易度」（1%の有意水準）、「知識の増加の程度」（1%の有意水準）がそれぞれ確認された。「性別」の回帰係数の符号がプラスであったことから、女子学生の方が男子学生よりも、「授業の満足度」が高いことが示唆される。また、「授業の難易度」の回帰係数の符号はプラスであったことから、「授業が易しかった」と回答した学生の方が、「授業の満足度」が高いことを示す。一方、「知識の増加の程度」の回帰係数の符号はプラスであったことから、「増えた」と回答した学生の方が、「授業の満足度」が高いことを示す。これらの推計結果はある意味で予測された通りであり、教員は受講生の側に立った分かり易い授業を心がけて、彼らの知識の増加に資することが「授

業の満足度」を高めることにつながる。但し、これまでの推計結果よりわかることは、「授業の習熟度」と「授業の満足度」を説明する要因が必ずしも一致しないことから、それらを両立することは、ある意味で困難を極める。すなわち、ある受講生においては「授業の習熟度」が高くても、授業レベルに物足りなさを感じて、「授業の満足度」が「低い」と回答する場合も起こりうるし、その逆も、当然起こりうる。実際に、質問票の集計結果の中で「授業に不満」と回答した学生22名の「期末テストの点数」、「最終評価の点数」はそれぞれ15.9点、77.4点であり、「授業に大変満足」、「授業に満足」と回答した学生の点数と有意な差が確認されなかった。このことから、「授業の習熟度」と「授業の満足度」のどちらに重きを置くかは、各々の教員の教育方針に委ねざるを得ないと考えられる。

表5 授業の満足度の説明要因

説明変数	被説明変数	授業の満足度
	最終評価の点数	-0.001 (-0.26)
	性別 (男性 = 0、女性 = 1)	0.125 (1.67) *
	コース名 (言語系 = 0、国際ビジネス = 1)	-0.041 (-0.46)
	高校時代のバックグラウンド	0.070 (1.59)
	関連科目の履修	-0.002 (0.04)
	TOEFLの点数	-0.0004 (-0.40)
	授業の難易度	0.202 (3.58) ***
	授業の出席度	-0.044 (-0.93)
	知識の増加の程度	0.242 (3.84) ***
	期末テストの準備	-0.027 (-0.45)
	重視科目 (語学系及び両方 = 0、社会科学系 = 1)	-0.003 (-0.03)
	海外経験 (なし = 0、あり = 1)	0.069 (0.78)
	定数項	2.178 (4.63)
	自由度調整済み決定係数	0.161
	サンプル数	170

(注) \*\*\*、\*\*、\*はそれぞれ1%、5%、10%の水準で統計的に有意であることを示す。括弧内は、t値。

## 5. 結語

本稿では、「国際関係論」を履修した学生を対象に質問票調査を行い、彼らが社会科学系科目をどのように位置づけて勉強しているのかを明らかにすると共に、「国際関係論」の習熟度の説明要因を考察した。以下では、上記の分析によって発見された主要な論点を取り上げて、まとめとしたい。

第1に、質問票調査からは、高校時代における社会系科目の知識の蓄積が、授業の難易度を決定する重要な要素として発見されたが、計量分析からは、「高校時代のバックグラウンド」

は全く有意な変数として発見されなかった。このことからすると、授業の習熟度を高める要素は、「高校時代の前知識」よりはむしろ、「関連科目の履修」の方が強く影響するのではないかと推察される。それゆえ、大学は単に整合性のない多くの必修科目を学生に課すのではなく、学生が幾つかの段階を経て、社会科学に関する知識を深めていけるようなカリキュラムの改正が必要であることが示唆される。

第2に、「社会科学系科目を重視して勉強したい」と回答した者が調査対象者全体の14.7%を占めていたが、計量分析からは「期末テストの点数」を説明する「重視科目」の回帰係数がマイナスで有意であり、「社会科学系科目を重視して勉強したい」と、回答した学生の方が期末テストの点数が低いことがわかった。このことは、「社会科学系科目の重視」と回答した学生が「社会科学系科目を勉強したい」と言うよりはむしろ、「語学系科目を避けて、社会科学系科目を選択」しているのではないかということが示唆される。

第3に、「勉強意欲を高める要素とは何か」という質問に対して、「授業内容に対する関心度」という回答が最も多く、次に「社会における実用性」という回答が続いた。「授業内容に対する関心度」を上げるには、教員は自助努力により、「教員の教え方」を向上させることと同時に、教員と学生との距離を近くするために、より小さなクラスサイズの実現なども、今後の取り組むべき課題であると思われる。このことは、記述式の質問に対する回答でも指摘されていた。また、「社会における実用性」という回答の多さからもわかるように、大学教育も「学術性」だけに固執するのではなく、経験、潜在能力、職業観、価値観といった総合的な力を学生に身に付けさせるような職業教育を策定・実施する時代に来ているのではないかと考えられる。

第4に、「授業の満足度」を説明する要因として、「授業の難易度」、「知識の増加の程度」が確認された。すなわち、「授業が易しかった」と回答した学生の方が、「授業の満足度」が高いことを示し、また「知識が増えた」と回答した学生の方が、「授業の満足度」が高いことを示す。これらの推計結果より、教員は受講生の側に立った分かり易い授業を心がけて、彼らの知識の増加に資することが「授業の満足度」を高めることにつながると示唆される。但し、「授業の習熟度」を説明する要因と「授業の満足度」を説明する要因が必ずしも一致しないことから、それらを両立することが困難であることも分かった。

本研究は「国際関係論」のみからのデータ収集の結果であり、勿論、この結論が国際言語学部の社会科学系科目の全てに当てはまるとは限らない。実際、社会科学系科目を担当している全ての教員がこのような調査を行って、データ処理をすることは困難であろう。また、筆者のみならず、他の教員においても、自分の担当科目の評価が事細かに明らかになることは興味があると同時に、やはり少し抵抗もあるかもしれない。しかし、本研究が試金石になり、社会科学系科目を教える教員の教授方法の向上、及び将来のカリキュラム改正に資する研究・調査が今後、展開されることが期待される。



- (8) 授業の出席度を教えてください。
1. 毎回出席
  2. ほとんど出席
  3. 時々欠席
  4. ほとんど欠席
- (9) この授業の履修前と比べて、国際事情に関する知識はどの程度（4段階評価で）増えましたか。
1. かなり増えた
  2. 増えた
  3. 少し増えた
  4. 以前と変わらず
- (10) この授業の皆さんの満足度を教えてください。
1. 大変満足
  2. 満足
  3. 不満
  4. 大変不満
- (11) (他の科目と比較して) 期末テストに対する準備の程度（4段階評価）を教えてください。
1. かなり勉強した
  2. ある程度勉強した
  3. 余り勉強しなかった
  4. 全く勉強しなかった
- (1および2を選択した人はその理由を教えてください)
1. 良い成績をとるため
  2. 国際関係が好きだから
  3. 勉強するのに特に理由なし
  4. その他 ( )
- (3および4を選択した人はその理由を教えてください)
1. 他の科目の勉強やアルバイトなど忙しく、勉強する時間が無かった
  2. 国際関係に興味が無いから
  3. 大学の勉強自体興味なし
  4. その他 ( )
- (12) 大学の勉強において、皆さんの勉強意欲を高める最も重要な要素は何であると思いますか。
1. 社会における実用性
  2. 成績や単位取得
  3. 教員の教え方
  4. 学生をひきつける教員の性格
  5. テキストなどの教材
  6. 課題や宿題の多さ
  7. 授業内容に対する関心度
  8. その他 ( )
- (13) 経済、経営、政治などのビジネス系の科目を英語で聴きたいですか。
1. ビジネスの知識を吸収するには日本語で聴く方が効率的なので日本語での講義の方が良い
  2. 英語力の向上には英語関連科目で勉強したいので日本語での講義の方が良い
  3. たとえほとんど理解できなくても英語での講義の方が良い
  4. 英語での方が理解しやすいので英語での講義の方が良い
- (14) 経済、経営、政治などのビジネス系の科目と語学力（英語、仏語、中国語、独語）の向上のどちらを重視して勉強していますか。
1. ビジネス系の科目
  2. 語学系の科目
  3. 両方
- (15) 中学生になってから、1ヶ月以上の留学経験、或いは1ヶ月以上海外で暮らした経験がありますか。
1. ある
  2. なし
- (16) ビジネス系の科目および国際言語学部のカリキュラムについて望むことを自由に書いてください。
- (うちだ・ともひろ 国際言語学部准教授)